中国と日本における小中学校の英語教育と英語教員養成の比較 —その①

陸　　君

はじめに

2016年３月４日に開かれた金沢大学教職大学院フォーラム『これからの教職大学院を考える』において、教職大学院の拡充とともに、日本の教員養成の高度化の必要性が示された。また、教職は高度専門職であり、現職教員の学び直し、管理職や各分野のリーダー養成の重要性が強調された。国際競争力の向上を担う次世代の教員養成は大卒者だけではなく、教職大学院の修了生が今後求められており、多数の国立大学が既に実践していることが報告された。従って、小・中・高の教員養成強化はこれからの急務になりつつある。

日本と中国にとって、英語は同じく外国語であり、国際競争にさらされるという状況も似ている。それぞれ小学校から英語教育をどのように取り入れているか、どんな成果をあげたか、またどんな問題を抱えているかについて、以前に石川県金沢市立押野小学校で英語インストラクターを10年以上勤めている石丸千重乃先生と共に、中国上海での小学校英語現地調査から得たデータを参考にして、今の日本と中国の小学校英語教育を比較研究した。今回は上海の小中学校英語教育及び教員養成についての調査結果と、現地調査の協力者・上海師範大学外国語学部で教育実習を担当する銭敦煒准教授の日本視察経験に加え、さらに日本と中国の小中英語現場教育と教員養成について比較し、問題解決の出口や改善の提案を示したい。

一．中国上海地区の小学校英語教育と新人教員研修

中国では、2001年９月に中国教育部から出された新課程方案（試行案）によって、小学校に外国語の教科を設けることとなった。ここ数年間にわたる上海の小学校の視察では、一年生から英語学習が始まり、教員は英語専攻の師範大学または総合大学の卒業生であり、35分の授業はほぼ英語だけで行われていることが分かった。

2014年～2017年度にわたる科学研究費「上海地区の小中高の英語教育現状と新人英語教員の研修の現地調査—日本への提言（課題番号：26370751）」での調査により、日本の教員養成の現状とこれからの方向性と比較するために、上海地区の英語教育の現状と教員養成の調査データを収集してきた。以下に挙げる４つの小中学校にて4人の新人英語教員を中心に授業見学や、授業後のインタビュー、カリキュラムや教科書の追跡調査を行った。対象者は①(私立)上海市進才実験小学校のＡ先生(女)、②(公立)上海敬業初等中学のＢ先生（男)、③(小中一貫公立)芦湾区教師研修学院附属中山学校のＣ先生（女)、④(半官半民)上海市大寧国際小学校のＤ先生（女）であり、この４人とも師範大学英語師範専攻を卒業し、教歴は３～５年目の20代の新人教員であった。

本稿では小学校英語教育と教員養成に焦点を当てるため、調査対象４人の内２人の小学校教員だけに絞る。小学校で英語を担当する２名の新人教員に関して、前年度までに行った追跡調査で集めたデータは以下の通りである。質問項目は各年度共通の９項目を用いた（表１）。

表１　上海地区の小学校英語教員に対するインタビュー調査内容と授業見学の所感

対象者	A 先生（女性）	D 先生（女性）
勤務校	上海市進才実験小学校（私立）	上海市大寧国際小学校（半官半民）
教員歴	５年目	３年目
対象者に関する特記事項	上海師範大学卒業時英語 BAND Test ８級合格（日本の英検準１級に相当）	上海師範大学卒業時英語 BAND Test ８級合格（日本の英検準１級に相当）・卒業前にインターン時の実習も見学
過去の調査歴	2014年に４年生、2015年に１年生の担当授業を見学	2014年に４年生、2015年に２年生の担当授業を見学
今回の調査時における担当学年	小学４年生	小学３年生
調査日時	2016年９月12日（月）９：20-10：00	2016年９月13日（火）14：50-15：25
見学した授業に対する調査者の所感	40分の授業。教科書は『Oxford English Shanghai edition』。昨年は１年生の授業で、開始直後に騒がしかったのでかなり子供達を叱りつけてから授業を開始していたが、今回は５年目で経験を積んだのか、また学年が４年生であるのか、非常に穏やかな表情で、英語ばかりの発話だけではなく生徒に人間味あふれる対応ができ、大きく変化した。	35分の授業。教科書は『Oxford English Shanghai edition』。低学年の授業は先生が英語ティーチングマシン化するのをよく目にしたが、生徒が機械的に反応しているのでなく、先生の英語を正しく聞き取り臨機応変に答えているのに驚く。やはり、週５回（毎日）Native Speaker レベルほどの正確で良い発音、かつスピードも早い上質の英語に小学１年生から接してきた成果であろう。
質問１　本時の授業目的は達成できたかどうか	できた	90％できた
質問２　現在の持ちコマ数・学年担任・他の分掌	４年生は週に５回の英語の授業がある。４年生は２クラス担当で合計10回の授業に加えて、ホームルーム担任も４年生であり、更に小学１年生（週４回）の授業もあるので今年は15コマ。	３年生週５回２クラスで10コマ。これに加えて Native Speaker との Team Teaching（以下、TT）が週に２回×２クラスで４コマ、合計週14コマ。担任はない。
質問３　授業の工夫	子供の動機付けを考えた、テンポの良い、様々なタスクを細かく効果的に切り替えた授業を目指している。指導案があっても、生徒の理解度により子供の理解が進むような調整を授業中に臨機応変にできるようになった。	Oxford 出版社から提供されているパワーポイント資料や指導書を担当生徒に合うように修正する。
質問４　前年度からの成長	緊張感が殆どなくなりリラックスできるようになり、教授面での向上を感じる。またクラス運営も上手くなったと感じる。	自信がついてきた。
質問５　目指す理想的な教師像	あらゆる面で経験を積んだ教員。	生徒と授業中にやりとりの出来る先生。
質問６　楽しみ	英語の授業をしている時が楽しい。	授業が上手くいった時（授業数が少なくなると嬉しいが）。
質問７　授業準備時間	小４は２度目なので以前のスライドを見返して今年の生徒用に微調整するだけなので15分程で済む。	１時間の授業に１時間ほどの準備時間が必要。パワーポイントや指導書の修正には毎時２～３時間かかる（睡眠・食事以外はほとんど授業準備になっているのが現状）。
質問８　教員研修	水曜か土曜に６時間の研修が今もある。文法・発音等英語教授に関連するものが大半であるが、クラス運営に関するものもある。	週に2回英語教授法講義や他の先生の授業見学。
質問９　その他	こどもの様子を把握して肩の力を抜いて授業でき、学習者中心の授業を上手く作りだしている。	※時間的制約のため回答得られず

上述したような上海における小学校英語教員の現地調査は３年目となり、授業見学を通して、英語教育の基盤づくりはやはり小学校教育からが重要ではないかと感じている。表１で挙げたように、ほとんどの教員は全員が学生時代に英語を専攻し、かつ師範大学の教員養成訓練を受けて卒業している。教師がすべて英語で話をしながら授業を進めることができている大きな理由のひとつはその点にあると考えられる。また、そのうえで各教師が授業構成を工夫し、生徒達も苦手意識を持つことなく楽しそうに授業へ積極的に参加している姿にも感銘を受けた。

二．　日本の小学校英語教育と教員養成

日本の場合、2005年に文部科学省指定の研究開発学校のうち77校が、また構造改革特別区域については55の自治体が、教科としての英語教育に取り組んでいる。さらに、私立小学校全194校のうち、2005年度に英語教育に取り組んでいる学校は、文部科学省による調査に対して回答を寄せた148校のうち135校である。これらの学校からは、小学校段階で英語教育を実施することによって、英語に対する関心・意欲が高まったことや、スキル面で一定の成果があったとの報告がなされている[1)]。

英語教育特区の金沢市の取り組み事例：

2017年７月６～７日の二日間、金沢大学附属小学校の英語授業見学と担当教員との懇談を行い、また金沢大学の Super Global Program における共通教育の英語教育に関する取り組みについても聞き取りを行った。

１、英語教育特区としての取り組み

2004年に英語教育特区の指定を受けた金沢市は、市内全小学校の３年生以上で、英語を週１時間の教科としてスタートさせた。

まず、金沢市の小学校で行われている英語の授業について概略を記すことにする。授業は、英語インストラクターと担任教師の二人一組で行われる。英語インストラクターは、英語を専門的に学んできた非常勤の指導者である。原則として各小学校に１名ずつ配置されているが、小規模校の場合は、２～３校を掛け持ちするインストラクターもいる。週１回の授業は、チーム・ティーチング（Team Teaching, 以下 “TT” と略記する）で行われる。授業案はインストラクターが作成し、担任教師と検討して決める。小学３～５年生には、金沢市教育委員会発行の副読本『Sounds Good １』と同『２』を使っている。小中一貫英語教育を標榜して、小学６年生には、中学校の教科書『New Horizon』を前倒しして使っている。

また、他教科と同様に、成績評価も行う。３・４年生は、「関心・意欲・態度」「表現」「知識・理解」の３つの観点で評価する。５・６年生は、「言語・文化の理解」という項目を加えて４つの観点で評価する。評価の基になるのは、授業での様子と、ワークシート、リスニングテスト、スピーチ、インタビューテストなどの結果である。６年生については、中学校の内容を先取りしている関係で、単語テストや本文の読みかたテストの結果も評価に加味している。同市の他校の場合は、インストラクターが評価の素案を作成し、担任が通知表につけている場合もある。

このように金沢市では、全国に先駆けて、小学３年生から教科として英語を教え始めたわけだが、特区スタート以前にも、一年に数回、教科としてではなく全学年で「英語活動」を行っていた。それを引き継ぐ形で、小学１・２年生には、年10回の英語活動がある。英語を身近に感じることに指導の重点が置かれ、担任教師が、挨拶や動物・野菜・果物の名前や色などを楽しく遊びながら指導している。年に２回ほど、インストラクターが授業に加わる場合もある。

さらに、小学校の全学年で、始業前の15分間の朝学習を、週１回は英語に充てている。前回の復習や、アルファベットを書く練習などを担任が指導している。

２．金沢大学附属小学校の英語教育

2011年から、小学校５・６年生を対象に、文科省の『英語ノート』を使った授業が全国で始まった。ここでの授業は、原則として担任教師が単独で行う。しかし、日本の小学校教諭の多くは、英語教育について専門的に学んだ経験が少ないため、自分の授業に自信を持てないとい

う教員が多いのが日本の教育現場における課題ではないかと考えられる。

ただし今回見学させて頂いた金沢大学附属小学校の3年生と6年生の授業では、30人のクラスを両方ともTTの方式で行い、担任している日本人の若手教員の発音も授業の進め方もとても上手で、外国人の非常勤教員との共同授業は子ども達に楽しい英語の学習時間を与えていた印象が強く、驚いた。日本の全ての小学校の英語教育はすべてこのようなレベルで行っていないかもしれないが、このTTの方法は上記のような日本の特別な事情においては非常に効果的であるという印象を受けた。同校は一年生からの英語の授業を5年前から始め、各クラスは担任の教員と外国人の英語教員によるTTで授業を行い、外国人教員の役割は主に発音練習と、楽しくかつユーモラスな雰囲気づくりを担っていた。

授業の見学を通して、子供の能力には大人が想像するよりはるかに優れた面があり、非常に驚かされた。週1回の授業でも、小学生は本当によく英語を覚える。それはベテランの教員による工夫された授業構成によるところが大きい。小学生が集中力を維持しやすいように、45分間の授業を3パートほどに分け、時間内にいくつもの活動を盛り込んでいるからだろう。また、間違うことへの抵抗感の少なさや、照れずにどんな友達とも英語で関われる発達段階であることも大きい。やはり小学校から英語を学び始めることが必要である。

英語は、音楽や図工などと似ており、専門知識を必要とする教科である。長期の研鑽を積み、技術を習得していないと、正しい知識や技術を教えることはできない。その意味で、インストラクターの存在意義は大きい。第一の利点として発音練習が挙げられる。小学校英語の語彙は基本的なものだけだが、たとえ英語のCD教材があっても、生で発音する様子を見れば、口の形や舌の位置も非常に分かりやすい。何度も繰り返すことも簡単である。第二の利点として、表現の微妙なニュアンスを伝えることである。自己紹介の文作りをする時などには、英語表現の細かいニュアンスにも適切なアドバイスができる。第三の利点としては、インストラクターが仲立ちすることで、日本語を話せない外国人を授業に招いて参加してもらうことができる。このように、専門の指導者の存在は、外国語学習の基盤づくりとして、学ぶ楽しさを伝え、好奇心を育て、正確な知識を与える上で不可欠なのである。

非常勤の外国人教員だけでは足りない点は、担任が満たすことができる。TTにおける担任の存在は、授業を円滑に進める環境作りの点で重要である。小学校の授業のほとんどは、担任教師一人が行う。TTでは、慣れ親しんだ担任がそばにいるので、児童は安心感を持って学習することができる。さらに、担任は個々の児童のことをよく分かっているので、学習の理解度や積極性の点で、どの生徒にサポートが必要かを、インストラクターに助言できる。 ペア活動で誰と誰を組み合わせるかについても、細かい配慮が可能である。

2人で行うTTならではの利点も見逃せない。外国語の学習は、元来、大教室で大人数を相手に行うには適していない。高校や大学での講義形式ならいざ知らず、コミュニケーションをとることを主眼にした小学校の英語学習では、今の日本の学級規模では無理がある。まさにそのような環境において、TTは非常に効果的な指導方法だと実感できる。例えば40人クラス全員の発音をチェックするとしても、指導者2人で分担すれば短時間で全員の確認ができ、節約できた時間で、児童の発話量や回数を増やすことができる。理解の遅い児童には、指導者1人が張りついて支援することもできる。英語の書き取りを授業後に採点する場合も、インストラクターがノートをチェックすれば間違いがなく、多忙な担任の負担を軽減することにもなる。

これらのことは今回の調査に協力いただいた教員にとっても共通の認識であり、TT方式の授業の重要性がうかがえた。問題は全ての小学校にこのようなネイティブ・スピーカー（Native Speaker）かそれに近いレベルのTTで教えることのできる教員が配置可能かどうかということである。

三．京都教育大学・小(中)学校英語教員の養成プログラム及び授業見学

科学研究費（2014～2017年）による「上海地区の小中高の英語教員養成」の研究協力者で、英語教育及び英語音声学を専門とする銭敦煒先生（上海師範大学外国語学部）の来日視察に合わせて、2017年７月５日～６日に京都教育大学における教員養成の授業見学や、担当教授と学生達にインタビューを行った。

収集したデータは以下の通りである：

１．見学した模擬授業と印象

７月５日水曜日２時間目（10：30-12：00）「小学校英語」

７月６日木曜日２時間目（10：30-12：00）「中等英語科教育Ⅳ」

時期的にはちょうど学期末でもあり、学生による模擬授業を見学させていただいた。１日目の「小学校英語」授業は、２回生の２つのグループが模擬授業を披露した。

１）グループ１の学生６人は、“Where do you want to go in summer vacation”のテーマで次のように授業を進めた。①導入として、簡単な挨拶の練習　②様々な国の様子が描かれた12枚の絵を黒板に並べて、まずは発音練習を行い、それからスマートフォンのアプリによりスピードが速くなる発音練習を slow → fast → faster と３回実施した。そして先生の質問“Where do you want to go”に対して、学生達が一斉に指定された国を“I want to go to...”で回答する。最後に、学生に２人での会話練習をさせた。

授業後は次のような振り返りを行った。①模擬授業を行った学生達自身の反省：つい日本語が出てくる、英語で授業を行うことがまだ力不足。発音練習といっても自分がまだ全部を正確に出来てない、など。②模擬授業を担当した学生と聴講学生とのディスカッション：数人の学生が質問や指摘をした。③指導教員からのコメント：“Where do you want to go...?”より“Where do you want to go to...?”の方が正しいのではという議論、また教育法や発音指導に関しても指導が行われた。

印象：このグループはかなりの事前準備をしていたように感じた。全体を通して活発な授業の流れで、反復練習が多く設定されていたので、授業の目的がおおむね達成できていた。しかし、発音の弱点が明らかに存在し、英語専攻ではない学生の英語力をどうやって高めるかがこれからの課題だと感じた。

２）グループ２の学生６人は全員国語専攻の男子学生で、形容詞の復習が模擬授業のテーマである。このグループも英語で授業を行い、順番で担当した部分を発表した。①パワーポイントで動物の絵を提示しながら発音練習をし、動物の特徴を中心に、前週習った形容詞の復習をした。②全体の進行役の学生が流暢な英語で授業を展開した。一番目の学生は動物の名前、二番目の学生はその動物に関する形容詞の発音練習、三番目の学生は動物と形容詞の関連についてジェスチャーのゲームで練習、四番目の学生は“What animal do you like?”“I like... の質問に答える形式で練習、五番目の学生は“Why do you like this animal?”“Because it’s＋形容詞”の復習。

授業後の振り返りについては次の通りであった。①模擬授業を行った学生達自身の反省：英語がすぐに出てこない、発音が正確に出来ていない、ジェスチャーで動物を当てるゲームでは伝えにくい場面が幾つかがあった、など。②模擬授業を担当した学生と聴講学生とのディスカッション：数人の学生が質問や指摘をした。③指導教員からのコメント：動物の鳴き声に関して日本語と英語の違いを説明し、また教育法や発音指導に関しても指導した。

印象：このグループも事前準備を入念にしていたが、進行役の学生以外は英語で授業を行う自信があまりなく、力がまだ足りない。やはり英語専攻ではない学生の英語力を高める訓練が重要であることを強く感じた。

３）２日目の模擬授業は、「中等英語科教育Ⅳ」で、主に授業の評価方法やプリント資料の活用などに関しての活動であったため、ここでは省略する。

４）視察に同行した上海師範大学の銭先生からは以下のような感想が述べられた：京都教育大学における小中学校英語の模擬授業の見学で感じたのは、指導教員の豊富な言語知識、熱心

な現場教育指導、周到な授業の準備、学生達の発表後の相互評価も細かく行い、とても効果のある授業であった。

教育学部以外の学生も、将来教員になりたい学生が多く各種の資格試験の準備をしている。日本は小学校を始め教育にとても力を注いでおり、高い質の教職学生を養成し、子どもを愛し平等な教育を全ての生徒に行き渡らせるために、大学の教員養成コースが大いに貢献していることを強く感じた（中国語の原文は巻末資料を参照）。

2．同校における小学校英語の履修単位について

a）一般外国語として「英語」6単位が必修（1－2回生）

「小学校英語」2単位が必修（2回生）

「小学校英語指導法」2単位と「小学校英語教材論」2単位を推奨（3回生）

b）主免実習は5週間、副免実習は2週間。

c）同大学ホームページで公開されている「小学校英語」授業のシラバス[2)]によると、授業計画は日本の大学や教育学部における小学校の英語教員養成プログラムと同じ15週間の設定になっているが、内容的には教育大学の教員養成の特徴が著しく含まれている。これからの一般大学における小学校英語教員養成に特に参考にできると考えられる点は以下のようにまとめられる。

①（授業の概要において）実際の小学校での英語活動のビデオ視聴や児童と教員の両方の立場に立って模擬授業を行うこと。

②（授業計画において）テキスト以外に、課外課題の設定とその記録の提出を要求すること。

③（授業の評価方法において）毎時間の小テストや平常・課題レポートを重視すること。

④「児童英語教育セミナー」などへの積極的な参加を促すこと。

四、問題と提案

中国では、上海地区のような大都会や地方の実験校または重点校においては中国語をほとんど使わず英語で授業が行われているが、農村部などで英語を流暢に話せない教員が英語を担当する場合、子どもたちは自然なオーラル・コミュニケーションを習得できないことが大きな問題となっている。政府は質のすぐれた視聴覚教材の開発普及に力を入れているが、ここで特徴的なことは、広大な国土に膨大な人口が存在する中国の状況においては視聴覚教材の利用が最も適しているという考え方が主流となっていることである。つまり、国費・公費を使ってネイティブ教員を教室に直接配置することは、政府の責任としてまったく想定されていない。優れた教材だけで、遠隔地にいる子ども達が標準的で流暢な英語運用能力を身につけることができるかは、今後も議論と検証が求められる点である。

しかし、中国の英語教員は先述した新課程方案（試行案）の新しいカリキュラムに非常に協力的であり、優秀な教員は、これまでの伝統的な役割と新しい役割とを上手に融合して試行錯誤している。上海で視察した小学校では、教員同士で協力し、教科書に付属するDVD教材を各自のクラスに適した内容に作り直し、そうした独自製作の教材が教科書の理解にとても大きな役割を果たしていた。

一方、日本における小学校英語教諭には、英語教育法について専門的に学んだ経験のない人が多い。それにより自分の授業に自信を持てない教員も多いことが伺え、指導者の質の向上は今も昔も日本の小学校英語教育における最大の問題点といえる[3)]。この問題を改善するには、中国のように教育大学の英語専攻や総合大学の英語専攻の卒業生で、かつ小学校教諭の免許を取得した学生を教員として採用することが重要ではないかと考える。そのうえで、全科目を担当するのではなく、英語だけを指導する体制が望ましい。それにより、教員自身も英語力に自信が持て、指導力も高まり、適切な技能を備えたプロフェッショナルとして小学生に英語を教えられる。

本稿はここ数年、科学研究費により中国上海地区の小中英語教育と新人教員の研修に関して行った現状調査、また日本における小学校の英語授業と大学での小学校英語教員養成の視察で収集したデータに基づき、日中の小学校英語教

育と教員養成について比較し、それぞれの現状や養成方法をまとめたが、教員養成と授業内容との関連などの具体的な分析はこれからの課題であり、更なる比較研究で明らかにしていかねばならない。日本の小学校英語教育については、英語教員の養成が急務となり、英語専攻ではなく、かつ自信に欠ける教員が授業を担う問題に対しては、現在は一部の小学校でTTの方策で補うことになっているが、将来的に全ての小学校にネイティブ・スピーカーあるいはそれに準ずるインストラクターの英語指導教員が配置可能かはまだ不明であり、やはり大学での英語教員養成が最も大事ではないかと痛感している。また小学校の新人教員研修も中国のように毎週・毎月に行い、英語を教えることへの自信が備わることを重視していくことが、問題解決の糸口になるのではないかと考えられる。

【補記】本研究はJSPS科学研究費「上海地区の小中高の英語教育現状と新人英語教員の研修の現地調査 ―日本への提言」（課題番号：26370751）および京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」による助成を受けたものである。

注

1）文部科学省『諸外国の初等中等教育』、2002年、pp.158-163.

2）京都教育大学教育学部平成29年度「小学校英語」シラバス　http://kyoumu.kyokyo-u.ac.jp/jikanwari/2017/search/syllabus.php?url＝syllabus/11003011_bb_Ja.html
（2017年10月29日確認）

3）陸君・石丸千重乃「日本と中国における小学校英語教育の現状と課題」『人間学研究』（京都文教大学人間学研究所）第14号、2014年、pp. 1-22.

参考文献

1. Carell, P.L. 1983. Background Knowledge in Second Language Comprehension. *Language Learning & Communication*, 2, pp.25-34.

2. Carell, P.L. 1990. Reading in a Foreign Language: Research and Pedagogy. *JALT Journal*, Vol.12, No.1, pp.53-74.

3. Han Baocheng 2012　中国の学校教育段階における英語言語教育：CEFRの影響について「CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価 ～CEFRが日本にもたらす示唆～」ブリティッシュ・カウンシル、文部科学省主催シンポジウム（2012年5月29日）実施記録
https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/japan/report/can-do-list
（2017年12月21日確認）

4. 本名信行 2004,「アジア諸国における英語教育の取組み－英語非公用語国を中心として」
『文部科学省中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会（第3回）2004年5月13日』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/__icsFiles/afieldfile/2014/08/12/1265543_001.pdf　（2017年12月21日確認）

5. 本名信行 2009,「近隣諸国における英語教育－中国の事例から」
『E・MAX“みんなの広場”：アジア諸国における英語教育―研究報告―』
http://e-max-kobe.typepad.jp/emax/2009/07/---7d75.html　（2017年12月21日確認）

6. Taura, H. 2008. A Comparative Study on University English Education in Japan and China. *JACET Journal*, 47, pp. 95-110.

資料

中国・上海師範大学の銭敦煒先生による日本の英語教育及び教員養成現場視察に関する寄稿

在对英语课堂的观摩中，让我体会到了教师的敬业与博学。虽说是临近期末复习考试，但教授还是设计了课堂专题实训和学生互评反馈的环节。学生参与度强、方法适用恰当、训练手段多样；教师的任务引领简明扼要、点评分析到位、概括总结清晰。在教学法课堂上，起初让我有些不解的是，感觉导入环节教师的解释太多，可能会影响学生的讨论思路发挥。而后经过与师生的交流才理解到这是教师在课堂上尽力顾及到每一个学生都理解吸收并参与活动，由此对教师坚持教育公平性的理念付诸于每一课堂的实践深感敬佩。

如果说教师的课堂引领来自于对学科教学的方法设计，那么学生的参与研讨反映出的应该是其严谨治学态度和专业发展意识。京都教育大学就是一所专门培训教师的高校，无论是在读学生，还是为提升学历而受训的在职教师，他们都非常注重专业素养和技能的提高。在教材分析、课堂设计、课件制作、组织活动、错误纠正等环节上都努力做到深入浅出，把模拟实训的磨合效果发挥到极致。

据了解，除教育类之外其它院校和专业的学生也有较多愿意在不同的社会领域申请教师职位，并已经着手报考各类教师资格证书，他们同样对教学的实践训练付予高度的重视。以小学为例，对教师职业素养和专业背景均为全科型的要求，所以一名教师不仅要具备丰富的专业知识，以及适合的教学方法，更应具备对学生的关爱和自身职业提升的意识。目前日本的教育发达地区已经在小学阶段开始了英语教学。虽然在其课程设置、教材编撰、教师能力、教学方法、评价体系等方面尚有很大的提升空间，但是当代的科技发展、文化交流、国际化全球化信息模式应用等绝非昔日可比。加之有更多正在或即将从事教育工作的教师有机会去国外求学深造，日本基础教育阶段的英语课程发展将逐步走向高效和规范。

短短的一周时间，日本给我留下的一个初步印象就是有序和效率。其有序不仅体现在社会管理公共行为的规则约束中，更将反映在英语教学循序渐进的科学发展上；其效率也不仅存在于技术产业的革新创举中，更将伴随着英语教学的整体水平提升上。

（要点１）京都教育大学の小学校英語の模擬授業見学については、指導教員の豊富な言語知識、熱心な現場教育指導、期末にもかかわらず周到な授業の準備、学生達の発表後の相互評価も細かく行い、とても効果のある授業であった。

（要点２）教育学部以外の学生も、将来教員になりたい学生が多く各種の資格試験の準備をしている。日本は小学校を始め教育にとても力を注いでおり、高い質の教職学生を養成し、子どもを愛し平等な教育を行うために、大学の教員養成コースが大いに貢献しているかを強く感じた。

（要点３）短い一週間の滞在だが、日本はとても秩序立っておりあらゆる面で効率性の高い社会であることがとても印象的であった。そうした良い秩序が、社会管理や公共マナーにも現れているとともに、英語教育の発展にも及んでいるように感じる。高い効率性が技術革新の面だけに留まらず、英語教育の全体的なレベルアップにも通じているように思える。